

湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

大学名 湘南医療大学

所 属 基盤共通領域

名 前 小谷千晴

作成日 2026年4月 20 日

1. 教育の責任

湘南医療大学看護学科では、基盤共通領域の講師として、看護学を学ぶ学生が専門的知識・技術を習得するための土台づくりに携わっています。これまで他大学において、ナーシングスキル・ナーシングプロセス・ヘルスアセスメントといった看護実践の根幹をなす科目を担当してきた経験を活かし、本学においても学生が臨床現場で通用する実践的な思考力と技術力を身につけられるよう、授業設計・指導に取り組んでいます。

また、前職では国家試験対策委員会の委員として、試験対策の計画立案や学生支援に携わってまいりました。この経験をもとに、本学でも4年生チューターとして国家試験合格に向けた個別支援や学習環境の整備に貢献したいと考えています。学生一人ひとりの状況を把握しながら、卒業・資格取得という目標達成を多角的にサポートすることが、現在の私の重要な責務のひとつです。

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

私の教育の根幹にあるのは、「すべての学生は成長できる」という揺るぎない信念です。看護師を目指す学生それぞれが、入学以前から積み重ねてきた経験や価値観を持ち、描く看護師像もひとりひとり異なります。ある学生は身近な家族の療養経験から看護の道を志し、またある学生は漠然とした「人の役に立ちたい」という想いを抱いて入学してくるかもしれません。その動機や背景がどのようなものであれ、私はそれぞれの学生が持つビジョンを尊重し、画一的な型にはめるのではなく、個々の強みと可能性を最大限に引き出す教育を追求したいと考えています。

看護教育において、知識・技術の習得はもちろん不可欠です。しかし私が同様に重要視しているのは、学生が「自分はどんな看護師になりたいのか」という問いに真剣に向き合い続けることのできる姿勢を育てることです。臨床現場では、教科書通りにいかない場面が無数に存在します。そのような状況に直面したとき、自分自身の看護観という軸を持っている学生は、困難を乗り越える力を発揮できると確信しています。授業や日々の関わりを通じて、学生が自らの看護師像を深め、磨いていける場を提供することが、私の教育者としての重要な役割だと捉えています。

2) 理念をもつに至った背景

この理念を形成するうえで大きな礎となったのが、青年海外協力隊員としてインドネシアで過ごした2年間の経験です。言語・文化・生活習慣・価値観が根本から異なる環境の中で生活・活動したことにより、「違いを受け入れ、違いから学ぶ」姿勢が自然と身につきました。異なる文化的背景を持つ人々と信頼関係を築くためには、まず相手の価値観を尊重し、自分の物差しで測らないことが不可欠であると、身をもって学びました。この経験は、看護師として多様な患者と向き合う力の基盤でもあり、同時に教育者として多様な学生と向き合う際の大きな強

みとなっています。

日本国内においても、学生の出身背景や考え方の多様性はますます広がっています。異文化理解の視点と多文化共生の精神を教育現場に取り入れ、どのような背景・価値観を持つ学生も安心して自己表現できる学びの場をつくることが、私の目標のひとつです。学生が互いの違いを認め合いながら共に成長していける学習環境を醸成することが、ひいては多様な患者・家族と向き合える看護師の育成にもつながると考えています。

学生が自分自身の看護師像に誇りと自信を持ち、社会へ力強く羽ばたいていける——そのプロセスに寄り添い、ともに歩み続けることが、私の教育者としての使命です。

3. 教育の方法・戦略

私が教育において最も大切にしているのは、学生と教員の双方向性のある関わりです。知識や技術を一方的に伝達するだけでなく、学生の声に耳を傾け、一人ひとりの理解度や成長を丁寧に把握しながら授業を進めることを基本姿勢としています。また、学生が「できた」「わかった」と実感できる瞬間を大切に、その積み重ねが看護師としての自信へとつながるよう支援しています。以下に、具体的な教育方法を示します。

■ リフレクションペーパーによるフィードバック

- ・ ナーシングスキルの演習後にリフレクションペーパーを回収し、全員分に目を通したうえで線や丸印、コメントを添えて返却する。
- ・ 特に優れた気づきや印象的な記述は、翌週の授業冒頭で「こんな意見がありました」と読み上げ、クラス全体で共有する。
- ・ これにより、学生は自分の振り返りが尊重されていると感じ、記述への意欲と思考の深まりが促される。

■ 演習室での個別指導

- ・ スキル練習にはとことん付き合うことを信条とし、演習室の開放時間にはなるべく足を運び、細かな手技の確認や個別指導を行う。
- ・ 積極的に練習に取り組んでいる学生には声をかけ、その努力を言葉でしっかりと認める。
- ・ 「頑張りをしている人がいる」という安心感が、学生の主体的な練習意欲を高めることにつながると考えている。

■ 学習効果を高める講義資料の工夫

- ・ 講義資料は穴埋め形式で作成し、授業をしっかりと聴かなければ埋められない設計にすることで、受動的な受講を防ぎ、集中力と理解度を高める。
- ・ パワーポイントの内容はすべて手元資料にも反映させることで、学生がスライドをスマートフォンで撮影する必要をなくし、学びに集中できる環境を整えている。
- ・ 重要なポイントは漏れなく資料にまとめており、学生からは「わかりやすい」との評価を得ている。

これらの方法に共通しているのは、学生の努力と声を可視化し、応答し続けるという姿勢です。教員からのフィードバックが届いていると感じることで、学生は安心して学びに向かうことができると思っています。

4. 学習成果

授業や演習を通じた学生の成長は、数値だけでは測れない部分も多くありますが、日々の関わりの中に確かな手応えを感じています。以下に、具体的な成果として実感していることを示します。

■ リフレクションの質的深化

- ・ 演習を重ねるごとに、リフレクションペーパーの記述内容が明らかに深まっていた。
- ・ 学期当初は「難しかった」「もっと練習が必要だ」といった表面的な記述が多かったものの、回を重ねるうちに患者の視点を意識した記述が自然と増えていった。
- ・ 例えば、「ケアをただ正確に行うだけでなく、患者の羞恥心・寒さ・不快感にも配慮しながら、適切な方法を選択することが大切だと気づいた」といった、看護師としての倫理観や感性の芽生えを示す言葉が多く見られるようになった。
- ・ こうした変化は、技術の習得にとどまらず、看護観の形成という本質的な成長が着実に進んでいることの表れだと捉えている。

■ 学内演習の臨地実習への接続

- ・ 病院実習において、学内演習で取り組んだ技術を実際の患者ケアの場で積極的に実践できたという報告を、複数の学生から受けた。
- ・ 呼吸音や心音の聴診、腹部の聴診・打診、浮腫の確認など、演習で実施したフィジカルアセスメントの技術が、実習現場でそのまま活かされた事例は、学内での指導と臨床現場のつながりを実感できる成果である。
- ・ 「演習でやったことが実習で役に立った」「たくさん練習したから自信をもって実施できた」という学生の言葉は、教育者として最もやりがいを感じる瞬間のひとつであり、演習の設計と個別指導が着実に実を結んでいることの証と受け止めている。

これらの成果は、双方向的な関わりと丁寧なフィードバックの積み重ねによって生まれたものだと考えています。学生の変化や成長を見逃さず言語化していくことが、今後の教育改善にもつながると認識しています。

5. 改善のための努力

■ 演習における個別指導の限界

学生数が多い場合、全員の指導に十分な時間をかけることが難しく、指導の質にばらつきが生じる可能性があります。Manaba や zoom のシステムを活用し、遠隔やオンラインでの効果的な双方向性の指導を確立したいと考えます。

■学内体制の把握不足

湘南医療大学への着任間もないため、学内の文化・体制・学生気質をまだ十分に把握できていません。4 年生チューターとしての国試対策支援も新たな役割であり、効果的な支援方法を模索している段階です。周りの先生方に協力を仰ぎながら、わからないことは積極的に質問し、戦力となれるよう努力してまいります。

■教育効果を客観的に示せる評価指標の整備

実感としては教育効果を感じていますが、客観的に示せる評価指標は整備できていません。今後取り組むべき課題であると考えます。

6. 今後の目標

短期目標として、まずは本学の体制への理解を深め、学生一人ひとりの特性を丁寧に把握することに注力します。半年以内には、湘南医療大学の体制に慣れて、積極的に教育活動に関わることを目標とします。4 年生チューターとしては、国家試験対策委員会での経験を活かしながら、本学の学生に合った支援方法を確立していきたいと考えています。

長期目標として、個別指導の質を維持しながら、より多くの学生に関われる指導体制の工夫も模索していきます。また、看護教育に関する最新の知見と教育学的理论を継続的に学ぶため、博士課程への進学を視野に入れ、教育者・研究者としてさらなる研鑽を積んでいく所存です。

【添付資料】

1. 発表論文

研究報告

基礎看護学実習前の模擬患者 (Simulated Patient) 演習に関する研究 (第3報) ー演習に参加した模擬患者の満足度と傾向ー

石井 千晴 川島 美佐子 山本 瑞恵 斉藤 利恵子 富山 美佳子

足利大学 看護学部

要旨

【目的】 基礎看護学の授業において、模擬患者 (Simulated Patient : 以下 SP) を活用した演習を実施した。演習に参加した SP の満足度および SP にとって有益な活動とは何かを明らかにすることを目的に研究を実施した。

【方法】 対象者は SP 演習に参加した SP48 名で、演習終了後、質問紙への回答を依頼した。参加した満足度と、SP に対する思いや考えは 5 段階の順序尺度とし、スピアマンの順位相関係数を用いて解析した。

【結果】 参加した満足度に対して、「看護職を育てることは誇りだ」「学生には好感が持てる」などの項目には相関が見られた (いずれも $p < 0.01$)。また、参加した満足度に対して、「模擬患者としてもっと勉強したい」「もっと経験したい」には相関が見られなかった (いずれも $p > 0.05$)。

【結論】 参加した満足度が高い場合は、社会貢献や看護学生とのふれあいの機会として、今後も SP 演習には参加しても良いと考えているが、SP としての学習や活動を行うことは望んでいないことがわかった。

キーワード：模擬患者 (Simulated Patient)、模擬患者演習、一般市民、
基礎看護学実習前

I. はじめに

看護職を含む医療職者教育において重要なメソッドとして「模擬患者参加型授業」がある¹⁾。模擬患者とは、ある人の身体的・精神的・社会的な状況をリアルに演じることができるように訓練された一般市民のことである。模擬患者には、模擬患者 (Simulated Patient: 以下SP) と標準模擬患者 (Standardized Patient) の2種類の使われ方がある²⁾。前者のSPは、医療職者として患者に対する態度やコミュニケーション能力の育成を目指した体験型学習に適応され、比較的自由度が高い患者役を演じる。一方、Standardized Patientは、臨床技能・態度の客観的評価を目的とした、客観的臨床能力試験 (OSCE; Objective structured clinical examination) に適応できる。OSCEは主に医歯薬系で臨床実習開始前の「共用試験」として正式採用されている。試験であるため、標準模擬患者には学生の評価に差異が生じないよう、標準化された患者役を演じることが求められる³⁾。本稿のSPは、前者であるSPを意味する。

看護系大学におけるSPの活用は、コミュニケーション能力を補完する教育方法として⁴⁾、あるいは学生自身の学習意欲の高まりに繋がる効果が見られるなどとして広がりを見せている^{5~7)}。本学においても、基礎看護学の授業において、よりリアリティのある臨床でのコミュニケーションに近い場面を想定した授業の工夫としてSP参加型の演習を取り入れた。

今回SPとして協力を得たのは地域の一般市民と大学職員であった。わが国の模擬患者の現状について、會田らは以下のように報告している¹⁾。模擬患者人口はおおよそ1,500名、グループもしくは団体は150~160と見積もられ、1998年の約13倍、2002年の約3倍に拡大している。模擬患者の2/3~3/4が、大学内の模擬患者研究会に所属し、その他は病院や任意団体、法人機関などの学外の模擬患者団体に所属して独自養成を受けながら活動している。活動形態も無償・有償ボランティアや短期雇用など様々である。活動の実質的内容も団体によって異なるが、模擬患者の善意や自助努力によると

ころが大きい現状がある。しかし、本学が所在するA県や隣接するB県にはSP団体の存在はなく、首都圏から学生数に見合ったSPを招くためには高額な費用が必要となる。そのため、今回は地域の一般市民と大学職員に無償のボランティアとして協力を得た。

一方で、その地域に住む一般市民がSPとして看護技術演習に参加することは、教育側の利点だけでなく、地域住民への健康教育の機会となったり、住民が教育の一端を担い役に立っていることに喜びを感じたりするなど、SPを担う地域住民側へのメリットも報告されている^{8,9)}。そのため、無償のボランティアとして参加したSPらと共にこの教育方法を継続して行くためには、SP自身が演習に参加することによるメリットを実感し、参加する意志を持ち続けてもらうことが必要であると考えた。そこで、継続的に、より地域に密着した一般市民のSPを活用した教育を構築するため、演習に参加したSPの満足度およびSPにとって有益な活動とは何かを明らかにすることを目的に研究を実施した。

II. 用語の定義

SP: 授業のねらいを理解し、入院している患者を演じる一般人のことである。厳密なシナリオの通り演じるのではなく、自由度のある演技をする。技術の良し悪しを指摘するのではなく、感じたことを学生に言葉でフィードバックすることが求められるひとである。

SP演習: 学生がSPにバイタルサイン測定や病歴・生活歴の聴取を行い、健康状態の把握を行う演習授業である。学生が、SPから患者としてどう感じたかフィードバックを受け、自分自身の対応やコミュニケーション技法を振り返る授業のことである。

III. 研究方法

1. 研究対象

2015年12月と2016年12月に行ったSP演習にSPとして参加した一般市民と大学職員で、研究の趣旨に同意の得られた者に、演習終了後

質問紙への回答を依頼した。本研究では回答のあった2015年23名と2016年25名、のべ48名を対象とした。

2. 授業の概要

本授業科目は、1年次後期に開講される診療の補助技術修得のための科目「基礎看護方法論II」である。科目の目的は、看護の対象となる人の健康上の課題をアセスメントするための基礎的知識と技術を学ぶことである。および、対象を観察し、看護をするために必須となるコミュニケーションの意義・目的を理解し、人間関係を形成するための基礎的技術を習得することである。内容は健康・生活歴に関するインタビュー技術、バイタルサインの測定技術である。

3. SPの概要

SPの平均年齢は、63.2歳であり、最高年齢83歳だった。1回の授業のSPの人数は23名から25名で、学生3名から4名に対し1名のSPを配置した。SPは、地域の社会福祉協議会のボランティア団体の方々や大学職員の関係者、および大学職員であった。

SPへの教育は、演習当日に実施した。まず、オリエンテーションとして①SP教育とは、②SPの種類と役割、③授業概要についてパワーポイントで説明した後、④フィードバックのポイントの説明した。さらに学生役、SP役に扮して教員が⑤フィードバックのデモンストレーションを行った。デモンストレーションでは想定される学生の反応、SPの反応とフィードバックの実際を演じた。エクササイズとしてSPを2つのグループに分けて練習を行った。

振り返りとして、授業終了後にSP体験を言語化するために、学生や授業の様子、患者を演じるということはどうであったか、学生へのフィードバックは適切であったか、などを話し合う時間を設けた。

4. 調査方法

調査内容は、基本属性（年齢、性別、職業）、参加動機、SP体験の有無、SPに対する考えや

思い、SPとして演習に参加した満足度などから構成された。参加した満足度とSPに対する思いや考えは、5段階の順序尺度（「とても満足した」「満足した」「ふつう」「あまり満足ではない」「満足ではない」および「とてもそう思う」「そう思う」「どちらかというとそう思う」「あまり思わない」「まったく思わない」）とした。

5. 分析方法

統計処理にはソフトSPSS16.0J for Windowsを用い、 $p < 0.05$ である場合に統計的有意とした。分析において、無回答の項目はその項目のみ欠損値として処理した。そのため、最大4の欠損値が生じた。Spearmanの順位相関係数を用いて解析した。

6. 倫理的配慮

本研究は、研究代表者の所属機関の倫理委員会の承認（平成27年12月10日、承認番号第10号）を受け実施した。同意を得る方法としては、研究対象者に研究の趣旨、内容、得られた研究データに付随する個人情報の管理法など文書および口頭で説明し同意を得た。説明内容は以下の項目とした。①研究課題名、②研究の趣旨・目的および期間、③協力の内容、④個人のプライバシーの保護、⑤学生の場合、成績評価への影響のないこと、⑥本研究から生じる個人の利益と不利益、⑦自由意思による参加、⑧同意の撤回、⑨費用の負担、⑩情報の公開、⑪研究成果の公表等であった。同意書への署名を以て研究参加への同意とみなした。個人情報の保護については、施設や個人が特定できないように符号化し、第三者にはわからないように取り扱った。なお説明の際は、わかりやすい表現を使用し、質問があったときには個別に口頭で説明も行った。

IV. 結果

1. 記述統計

記述統計の結果を表1に、参加動機を図1に示した。男性16名、女性32名、平均年齢63.2 (± 12.7) 歳であった。参加動機（複数回答）

は「本学関係者からの依頼」が23で最も多く、ついで「知人友人からの誘い」が15、その次に「ボランティア団体からの依頼」が続いた。

表1 SPの基礎的属性的属性について

項目		n=48(100%)
年齢	平均	63.2歳
	標準偏差	±12.7
	無回答	1(2.1)
性別	男性	16(33.3)
	女性	32(66.7)
	無回答	0(0)
現在の仕事の有無	あり	16(33.3)
	なし	32(66.7)
	無回答	0(0)
社会活動やボランティア活動の有無	あり	18(37.5)
	なし	30(62.5)
	無回答	0(0)
医療職経験の有無	あり	2(4.2)
	なし	44(91.7)
	無回答	2(4.2)
教育関係職の経験の有無	あり	30(62.5)
	なし	17(35.4)
	無回答	1(2.1)
入院経験の有無	あり	29(60.4)
	なし	19(39.6)
	無回答	0(0)
模擬患者の経験の有無	あり	11(22.9)
	なし	36(75.0)
	無回答	1(2.1)

現在、仕事をしている人は16名(33.3%)で、していない人は32名(66.7%)であった。社会活動やボランティア活動を行っている人は18名(37.5%)で、していない人は30名(62.5%)であった。看護職と多く接する機会と考えられる入院経験の有無は、ある人が29名(60.4%)で、ない人が19名(39.6%)であった。

模擬患者の経験の有無として、ある人が11名、ない人が36名、無回答1名であった。ただし、2年目のアンケートにおいて、1年目のSP経験を「模擬患者経験あり」と記載した人が一定数いると思われる。

2. 満足度

SP演習に参加した満足度を聞いた質問に対して、「とても満足した」「満足した」が合わせて25名、「あまり満足ではない」「満足ではない」が合わせて22名であり、「ふつう」は1名であった(図2)。

3. 満足度との相関

1) 学生に対する印象や感情

学生に対する印象や感情については、満足度のグラフと同じように、「思う」と「思わない」で2分した結果となった(図3)。満足度と質

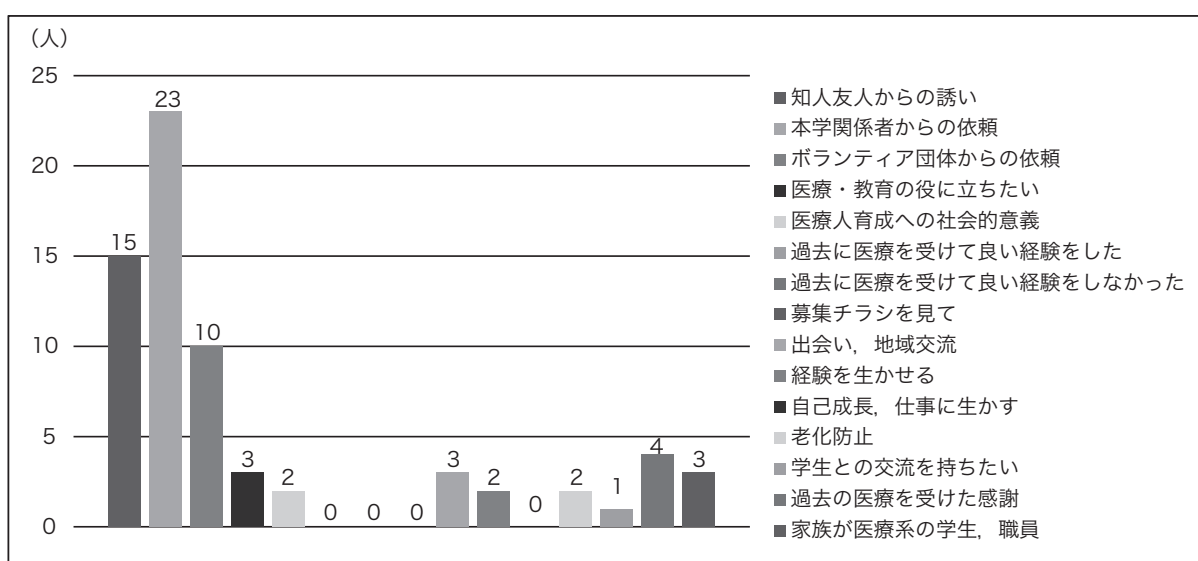


図1 SP演習へ参加した動機(複数回答あり)のアンケート結果

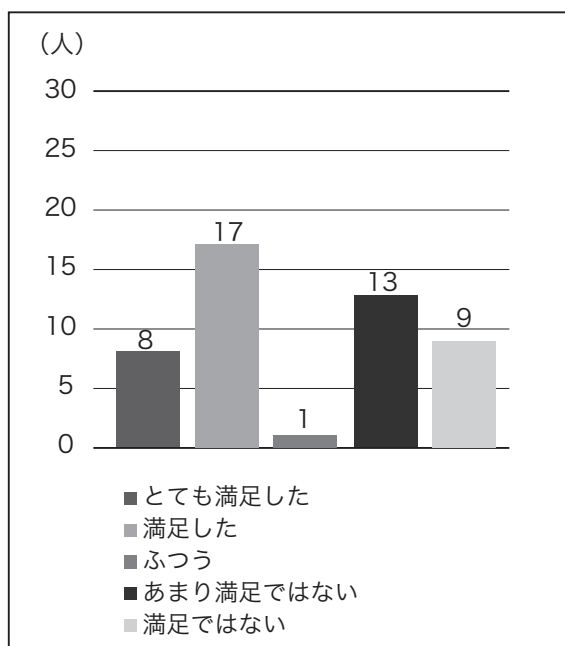


図2 参加した満足度のアンケート結果 (n=48)

問項目、「将来の学生に期待している」「学生に親しみを感じた」「学生はまじめである」「学生には好感が持てる」の関連は有意であった（それぞれ $r=0.913$, $r=0.923$, $r=0.879$, $r=0.878$, いずれも $p<0.01$ ）（表2）。学生に対して好感的な印象や感情を持ったSPは、演習自体も満足した傾向にあることが明らかになった。

2) 大学教育・看護職教育に参加することの意義

満足度と教育へ参加することに見出しを考えると考えられる項目、「看護職を育てるこ

表2 満足度と学生に対する印象や感情との相関

相関係数		n=48
		参加した満足度
将来の学生に期待している	相関係数	0.913**
	有意確率	0.000
学生に親しみを感じた	相関係数	0.923**
	有意確率	0.000
学生はまじめである	相関係数	0.879**
	有意確率	0.000
学生には好感が持てる	相関係数	0.878**
	有意確率	0.000

** 相関は、1 % 水準で有意。(両側) $p<0.05$
Spearmanの相関係数

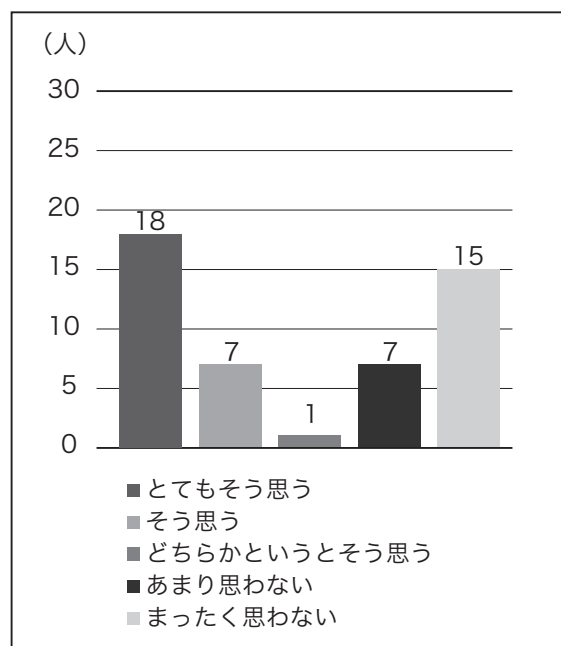


図3 「将来の学生に期待している」についてのアンケート結果 (n=48)

とは誇りだ」「看護職を育てることは社会貢献につながると思う」「大学教育に参加することは社会貢献につながると思う」「模擬患者を活用した教育は必要だと思う」の関連は有意であった（それぞれ $r=0.793$, $r=0.873$, $r=0.866$, $r=0.857$, いずれも $p<0.01$ ）（表3）。SP演習に参加することに意義を見出しているSPは、演習自体にも満足した傾向にあることが明らかになった。

表3 満足度と大学教育・看護職教育に参加することの意義との相関

相関係数		n=48
		参加した満足度
看護職を育てることは誇りだ	相関係数	0.793**
	有意確率	0.000
看護職を育てることは社会貢献につながると思う	相関係数	0.873**
	有意確率	0.000
大学教育に参加することは社会貢献につながると思う	相関係数	0.866**
	有意確率	0.000
模擬患者を活用した教育は必要だと思う	相関係数	0.857**
	有意確率	0.000

** 相関は、1 % 水準で有意。(両側) $p<0.05$
Spearmanの相関係数

3) SPの役割や授業に参加する方法のとりえ方

満足度とSPの役割や授業に参加する方法のとりえ方の項目、「指導に忠実に心がけた」「必要なことはフィードバックすることである」「必要なことは授業を理解することである」の関連は有意であった(それぞれ $r=0.612$, $r=0.526$, $r=0.552$, いずれも $p<0.01$) (表4)。また、「必要なことは熱意である」と満足度の関連も有意であった ($r=0.409$, $p<0.01$)。「必要なことは適切なアドバイスである」と満足度の関連も有意であった ($r=0.411$, $p<0.01$)。満足度が高かった人は、授業を理解しようと心がけ、フィードバックを重要視していたことが明らかになった。

4) 今後のSP活動について

満足度と「自分の楽しみややりがいになる」という項目ではマイナスの相関となり、有意であった ($r=-0.355$, $p<0.05$) (表5)。満足度と「模擬患者としてもっと勉強したい」という項目に有意差はなかった ($r=0.215$, $p=0.156$)。また、満足度と「模擬患者としてもっと経験したい」という項目にも有意差はなかった ($r=-0.017$, 有意確立 $p=0.914$)。満足度が高かったとしても、楽しみややりがい、もっと勉強したいという気持ちにつながるわけではないということが明らかになった。また、満足度と「他

の模擬患者と交流を持ちたい」という項目の関連は有意であった ($r=-0.690$, $p<0.01$)。満足度の高かった人は他のSPと交流を持ちたいとは思うことはなく、満足度の低かった人は交流を持ちたいと考えていた可能性が考えられた。

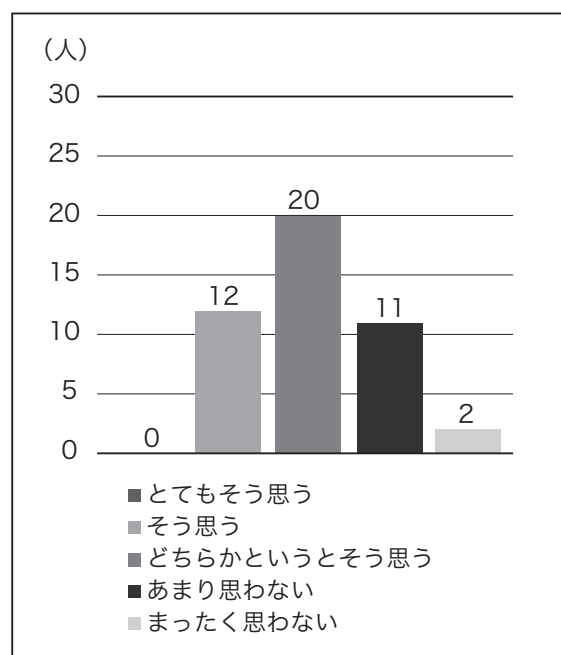


図4 「自分の楽しみややりがいになる」についてのアンケート結果 (n=48)

表4 満足度とSPの役割や授業に参加する方法のとりえ方についての相関

相関係数		n=48
		参加した満足度
指導に忠実に心がけた	相関係数	0.612**
	有意確率	0.000
必要なことはフィードバックすることである	相関係数	0.526**
	有意確率	0.000
必要なことは授業を理解することである	相関係数	0.552**
	有意確率	0.000
必要なことは熱意である	相関係数	0.409**
	有意確率	0.005
必要なことは適切なアドバイスである	相関係数	0.411**
	有意確率	0.005
** 相関は, 1 % 水準で有意。(両側)		$p<0.05$
Spearmanの相関係数		

表5 満足度と今後のSP活動についての相関

相関係数		n=48
		参加した満足度
自分の楽しみややりがいになる	相関係数	-0.355*
	有意確率	0.017
模擬患者としてもっと勉強したい	相関係数	0.215
	有意確率	0.156
模擬患者としてもっと経験したい	相関係数	-0.017
	有意確率	0.914
他の模擬患者と交流を持ちたい	相関係数	-0.690**
	有意確率	0.000
** 相関は, 1 % 水準で有意。(両側)		$p<0.05$
* 相関は, 5 % 水準で有意。(両側)		
Spearmanの相関係数		

5) 今後のSP演習への参加

満足度と「今後も参加したいか」についての関連は有意であった ($r=0.410, p<0.01$) (表6)。満足度の高かった人は、多くが今後もSP演習に参加してもよいと考えていることがわかった。

4. 満足度以外の相関

1) 学生に対する印象や感情とSP教育の意義

「看護職を育てることは誇りだ」「模擬患者を活用した教育は必要だと思う」「将来の学生に期待している」「学生に親しみを感じた」「学生はまじめである」「学生には好感が持てる」の5項目は、それぞれを2項目の間で相関係数と有意確立を分析したところ、有意であった (いずれも $p<0.01$) (表7)。学生に好印象を持っている人はSP演習に参加することに誇りや必要性を感じている人であることが明らかになった。

表6 満足度と今後のSP演習への参加についての相関

相関係数		n=48
		参加した満足度
今後も参加したいか	相関係数	0.410**
	有意確率	0.004
** 相関は, 1 % 水準で有意。(両側)		$p<0.05$
Spearmanの相関係数		

2) 今後のSP活動について

「模擬患者としてもっと勉強したい」と「もっと経験したい」の関連は有意であった ($r=0.647, p<0.01$)。また「自分の楽しみややりがいになる」と「他の模擬患者と交流を持ちたい」の関連は有意であった ($r=0.636, p<0.01$)。「もっと経験したい」と「自分の楽しみややりがいになる」の関連は有意であった ($r=0.355, p<0.05$)。一部の参加者は、SPの活動が自分の楽しみややりがいになる可能性があり、他の模擬患者ともっと交流することを望んでいることが明らかになった。ただし、「模擬患者としてもっと勉強したい」と「自分の楽しみややりがいになる」の関連には有意差はなかった ($r=0.023, p=0.883$) (表8)。

3) SPの社会貢献性と個人の楽しみ

SPの経験を「自分の楽しみややりがいになる」「他の模擬患者と交流を持ちたい」と今後の活動を肯定的に考えている人と、「看護職を育てることは社会貢献につながると思う」「大学教育に参加することは社会貢献につながると思う」と社会貢献としてとらえていると考えられる人ではマイナスの相関が見られた (表9)。「自分の楽しみややりがいになる」と「看護職を育てることは社会貢献につながると思う」の

表7 学生に対する印象や感情とSP教育の意義についての相関

		相関係数					n=48
		模擬患者を活用した教育は必要だと思う	将来の学生に期待している	学生に親しみを感じた	学生はまじめである	学生には好感が持てる	
看護職を育てることは誇りだ	相関係数	0.758**	0.808**	0.808**	0.803**	0.837**	
	有意確率	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	
模擬患者を活用した教育は必要だと思う	相関係数		0.920**	0.860**	0.892**	0.871**	
	有意確率		0.000	0.000	0.000	0.000	
将来の学生に期待している	相関係数			0.887**	0.911**	0.905**	
	有意確率			0.000	0.000	0.000	
学生に親しみを感じた	相関係数				0.888**	0.901**	
	有意確率				0.000	0.000	
学生はまじめである	相関係数					0.942**	
	有意確率					0.000	

** 相関は, 1 % 水準で有意。(両側)

 $p<0.05$

* 相関は, 5 % 水準で有意。(両側)

Spearmanの相関係数

関連は有意であった ($r = -0.363$, $p < 0.05$)。同じように「自分の楽しみややりがいになる」と「大学教育に参加することは社会貢献につながると思う」も有意であった ($r = -0.372$, $p < 0.05$)。また、「他の模擬患者と交流を持ちたい」と「看護職を育てることは社会貢献につながると思う」の関連は有意であった ($r = -0.688$, $p < 0.01$)。同じように、「他の模擬患者と交流を持ちたい」と「大学教育に参加することは社会貢献につながると思う」の関連も有意であった ($r = -0.664$, $p < 0.01$)。ただし、「模擬患者としてもっと勉強したい」と「看護

職を育てることは社会貢献につながると思う」でも有意であった ($r = 0.310$, $p < 0.05$)。今回のSP演習への参加者では、楽しみややりがいになると考えている人はSP活動を社会貢献としてとらえていないことがわかり、一方でSP活動を社会貢献としてとらえている人は、自分の楽しみややりがいになるとは考えておらず、また他のSPとの交流を求めていることがわかった。しかし、看護職を育てることは社会貢献につながると考えており、かつ模擬患者としてもっと勉強したいと考えている人もいることがわかった。

表8 今後のSP活動についての相関

相関係数		n=48		
		もっと経験したい	自分の楽しみややりがいになる	他の模擬患者と交流を持ちたい
模擬患者としてもっと勉強したい	相関係数	0.647**	0.023	-0.040
	有意確率	0.000	0.883	0.795
もっと経験したい	相関係数		0.355*	0.242
	有意確率		0.017	0.109
自分の楽しみややりがいになる	相関係数			0.636**
	有意確率			0.000
** 相関は, 1 % 水準で有意。(両側)				p<0.05
* 相関は, 5 % 水準で有意。(両側)				
Spearmanの相関係数				

表9 SPの社会貢献性と個人の楽しみに関する相関

相関係数		n=48				
		もっと経験したい	自分の楽しみややりがいになる	他の模擬患者と交流を持ちたい	看護職を育てることは社会貢献につながると思う	大学教育に参加することは社会貢献につながると思う
模擬患者としてもっと勉強したい	相関係数	0.647**	0.023	-0.040	0.310*	0.288
	有意確率	0.000	0.883	0.795	0.038	0.055
もっと経験したい	相関係数		0.355*	0.242	0.054	0.054
	有意確率		0.017	0.109	0.725	0.727
自分の楽しみややりがいになる	相関係数			0.636**	-0.363*	-0.372*
	有意確率			0.000	0.014	0.012
他の模擬患者と交流を持ちたい	相関係数				-0.688**	-0.664**
	有意確率				0.000	0.000
看護職を育てることは社会貢献につながると思う	相関係数					0.938**
	有意確率					0.000
** 相関は, 1 % 水準で有意。(両側)				p<0.05		
* 相関は, 5 % 水準で有意。(両側)						
Spearmanの相関係数						

V. 考察

演習への協力を得たSPの半数は満足感を得ていて、半数は満足感を得ていなかったことが明らかになった。満足感がどのような理由で2分されたのかについて、以下のような傾向が推測できた。

学生に対して好感的な印象や感情を持ったSPは、演習自体も満足した傾向にあることが明らかになった。また、それらの人はSP演習に参加することに意義を見出しており、SP演習を社会貢献の場としてとらえていた。さらに、満足度の高かった人は、多くが「今後もSP演習に参加したい」と考えていることがわかった。しかし、満足度が高く「今後も参加したい」と思っている、「模擬患者としてもっと勉強したい」「もっと経験したい」と思っているわけではなかった。さらに満足度の高かった人は他のSPとは交流を持ちたいと思うことなく、逆に満足度の低かった人は交流を持ちたいと考えていたことが明らかになった。

一方で、SP活動を「自分の楽しみややりがいになる」「他の模擬患者ともっと交流したい」と考えている人は、満足度が低い傾向になった。このことは、SP演習にものたりなさを感じた可能性が推測できる。阿部らは¹⁰⁾SPが満足感を得られる重要な因子の1つとして「医療者や学習者そしてSP同士の交流」を挙げている。そのため、今回満足感を得られなかったSPの中には、他の模擬患者と交流するなど、演習への参加だけではない活動を期待していた可能性が考えられる。今後、希望する人にはSP同士の交流を増やすことも検討する必要があると考えられ、その場合にはSP活動の継続と活発化が期待できる。

城野らの報告では¹¹⁾SPらは「学生と関わることや教育の一端を担い役に立っていることに喜びを感じ、今後も模擬患者役として参加したいと要望して」いる人が多いとのことである。しかし、今回の研究では「満足度が高く、学生の印象も良く、SP演習に意義を感じていた人」と、「満足度は高くなかったものの、SP活動は自分の楽しみややりがいになる可能性があり、他の

SPともっと交流することを望んでいる人」とに大きく2分した。要因としては、今回の参加者は、SP演習の趣旨に賛同して参加した人だけではなく、大学職員自身や大学関係者から依頼された人が多かったということが考えられる。実際に参加動機は「本学関係者からの依頼」が最も多く、次いで「知人友人からの誘い」、「ボランティア団体からの依頼」であったため、自らの希望だけでSP演習に参加した人はほとんどいなかったと考えられる。そのため、自ら希望したのではなく、頼まれて参加した人たちの満足度が高くなかった可能性は推測されるが、今回の質問項目だけでは制限があり、どのような属性の参加者にとっては満足度が高く、どのような参加者では満足度が低かったのかまでは明らかにならなかった。

阿部らは¹⁰⁾、演習や実習等に参加した模擬患者が充実感や満足感を得るための最も高い要因として「学習者の成長が実感できること」を挙げている。一方でSPが満足を得られない要因として、SP養成者やファシリテータなど、主催者側の準備不足や意識不足が影響しているとも述べている。また山崎らは¹²⁾、SPもフィードバック時の方法や言葉の選定方法などについて、常に試行錯誤しながら活動を実施しており、自己の発言に対する責任を感じていると述べている。このことから、今後は主催者側に演習の準備不足を感じさせる点やSPとの意識の乖離がなかったかどうか、また演習終了後の心理状況を配慮し、SP自身の肯定感を上げられるような振り返りを再度検討し、満足度を上げていけるよう努力する必要がある。また、客観的指標を用いてSPの演技やフィードバックを評価したり、学生の感想と感謝の気持ちを手紙で届けたりするなど、学習者の成長をSPに感じてもらえるような演習の工夫も必要であると考えられる。

今回の研究により、地域住民ボランティアによるSP演習を今後も継続するためには、満足度の高かったSPには今後も続けて参加してもらい、一方で満足度の低かったSPには他のSPとの交流の場を設ける、経験の場を増やすなど、もう少しSPとしての活動を活発化させること

で満足度を上げることができるのではないかと
いう推測が持てた。看護系大学において模擬患
者の活用が広がりを見せている中、大都市から
離れた地域では、このようにSPを大学で独自
に養成し活動を行っている。その地域に住む一
般市民にSPとして継続して活動してもらうこ
とで、看護の対象としての患者および家族の深
い理解につながり、よりリアリティのある看護
教育を提供することができるからである¹³⁾。
一方で、SPとして来てくれる一般市民にとっ
ても、このSP演習が大学生と交流を深めたり、
生きがいにつながったりする場となってくれる
ことが望ましい。そのためにも、SP演習の継
続に向け、上記の傾向を踏まえ、カリキュラム
の構築や演習の準備を見直し、地域の人々が活
躍できるようなSPの養成を行っていききたいと
考える。

VI. 研究の限界

初年度は大学職員にSPを依頼した割合が多
かった。また一般市民の募集に関しても、広く
一般から募集したわけではなく、関係者を通し
た依頼も多かった。そのため、今回の調査結果
はすべてが一般市民のSPとしての傾向である
とはいえない。今後は、関係者からの依頼と、
それ以外の一般市民の方々とに分けた分析が必
要であると考えられる。また、アンケート数の関係
上、2年にわたり2回実施されたアンケートを
使用していることから、同一人物が2度回答し
ている場合もあり、アンケート結果に偏りが出
た可能性が考えられる。

引用文献

- 1) 會田信子, 半谷眞七子, 阿部恵子, 他. 模
擬患者用ストレス調査表 (SPSSQ) 2013
年度版の開発と信頼性・妥当性の検証—模
擬患者の健康と継続参加を志向したスト
レス状態の包括的測定—. 看護科学研究,
2014 ; 12 : 1-23.
- 2) 鹿島英子, 吉村牧子, 吉本和樹, 他. 高齢
者SP (Simulated patient) 養成の課題.
関西医療大学紀要, 2014 ; 8 : 20-25.
- 3) 阿部恵子, 藤崎和彦, 伴信太郎. 模擬患者
の協力を得た身体診察実習の今後の方向
性. 日本保健医療行動科学学会年報,
2008 ; 23 : 59-73.
- 4) 厚生労働省. 看護教育の内容と方法に関す
る検討会報告書. 2011. [http://www.mhlw.
go.jp/stf/houdou/2r98520000013l0q-
att/2r98520000013l4m.pdf](http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000013l0q-att/2r98520000013l4m.pdf) (2017年9月
26日参照).
- 5) 森谷利香, 九津見雅美, 池田七衣, 他. 看
護系大学生の学習意欲とコミュニケーション
能力に関する研究. 千里金蘭大学紀要,
2011 ; 8 : 191-199.
- 6) 谷村千華, 西尾育子, 野口佳美, 他. 「対
象理解」を学習目標とした模擬患者参加型
教育の効果. 米子医学雑誌, 2016 ; 67 :
56-64.
- 7) 中村もとゑ, 山崎歩, 渡邊聡美, 他. 看護
系大学における模擬患者の養成および活用
の現状と課題. 日本赤十字広島看護大学紀
要, 2016 ; 16 : 29-38.
- 8) 阿部オリエ, 小手川良江, 本田多美枝, 他.
看護学実習前演習に地域住民が模擬患者
(simulated patient : SP) として参加する
ことの意義に関する研究. 日本赤十字九州
国際看護大学紀要, 2012 ; 11 : 49-58.
- 9) 玉田雅美, 澁谷幸, 池田清子, 他. 地域住
民ボランティアが参加する看護技術演習の
意義—地域住民の思いと効果—. 神戸市看
護大学紀要, 2014 ; 18 : 29-38.
- 10) 阿部恵子, 鈴木富雄, 藤崎和彦, 他. 模擬
患者(SP) の現況及び満足感と負担感：全
国意識調査第一報. 医学教育, 2007 ; 38
(5) : 301-307.
- 11) 城野美幸, 佐藤亜月子, 吉田千鶴, 他. 基
礎看護技術演習で模擬患者を経験した地域
住民ボランティアからの学生と大学教育へ
の要望. 帝京科学大学紀要, 2016 ; 12 :
141-146.
- 12) 山崎歩, 中村もとゑ, 鈴木香苗, 他. 看護
系大学で活動する模擬患者ボランティアが
抱える課題. 日本赤十字広島看護大学紀

要. 2016 ; 19 : 39-46.

- 13) 杉原百合子, 三橋美和, 小笠美春, 他. 看護学部における地域住民参加型教育の取り組みと今後の課題－模擬患者の養成と看護OSCEへの参画支援を通して－. 同志社看護. 2017 ; 2 : 37-44.

Studies for Outcomes of Simulated Patient-based Preclinical Training : Third Report

— Based on Simulated Patient Satisfaction and Perspectives —

Chiharu Ishii Misako Kawashima Mizue Yamamoto

Rieko Saito Mikako Tomiyama

Department of Nursing, Ashikaga University

Abstract

【Purpose】 Prior to clinical training in the Basic Nursing course, we held simulated patient (SP)-based preclinical training sessions, and measured the satisfaction levels of those who acted as SPs in the sessions. We also examined useful activities from their perspectives.

【Methods】 We studied 48 persons who participated in the preclinical training sessions as SPs, asking them to respond to a questionnaire after the session. Their responses, representing their satisfaction with the session and opinions about SP, were scored using a 5-point ordinal scale. The obtained data were analyzed to calculate Spearman's rank correlation coefficient.

【Results】 There was a correlation between the SP satisfaction level and some subscales, including: "It is an honor to nurture nursing professionals" and "I feel friendly toward students" ($p < 0.01$ in both cases). The SP satisfaction level was not correlated with "I want to learn more as an SP" or "I want to have further experience as an SP" ($p > 0.05$ in both cases).

【Conclusion】 SPs with higher satisfaction levels showed positive attitudes toward participating in SP-based preclinical training sessions again to contribute to society and communicate with nursing students, but they were unwilling to learn and develop activities as an SP.

Key words : simulated patients (SP), simulated patient-based training, general citizens, preclinical basic nursing training